

令和2年度 教養学部学位記伝達式

教養学部長式辞（令和3年3月18日）

---

皆さんご卒業おめでとうございます。教養学部後期課程の3学科をご卒業される皆様に対し、教養学部長として心からお祝い申し上げます。今年も新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の影響で、卒業式は部分参加となっていますが、900番教室を用いて少し人数を増やすことができました。参加できない皆さんには大変申し訳なく思っています。後ほどこのメッセージをホームページで見たいと思います。

さて、この COVID-19 ですが、最近出た沖縄科学技術大学院大学のスバンテ・ペーボ教授の論文によると、我々の祖先はネアンデルタール人と交雑した形跡があり、一部の遺伝子（正確にはコア・ハプロタイプ）を引き継いでいるとのこと。これらの遺伝子の中には、COVID-19 の重症化を防ぐタイプと、逆に重症化させるタイプがあるそうです。幸いなことに、日本人は重症化させるタイプだけがないそうです。いろいろと議論があるでしょうか、このことが原因で日本では高齢者比率が高い割に感染者・死者が少ないのかもしれないとの説もあります。

さて、皆さんはユヴァル・ノア・ハラリが記した「サピエンス全史」を読んだことがありますか。私たち人類、つまりホモ・サピエンスは生物学的にヒト科に属します。ヒト科にはかつて、ホモ・サピエンスだけでなくネアンデルタール人（ホモ・ネアンデルターレンシス）などが存在していました。しかし、今日生き残っているのはホモ・サピエンスだけです。なぜホモ・サピエンスが生き残ったのか、これに対する一つの仮説がサピエンス全史です。ちなみに、「サピエンス」というのは「賢い」という意味で、自分で「賢い人」と名付けているわけです。人間は随分と自己中心的ですね。

サピエンス全史の主要な論点は3つあり、第1は認知革命です。人類はある時点で脳に変化が生じ、フィクション（虚構）を信じ、共有できる認知能力を獲得したということです。この「フィクション」って何でしょう。今から具体例をお見せします。この1万円札、本当のところは日本銀行が刷った紙切れですが、枚数を出せば日本の社会においてほとんど何にでも交換できます。実は通貨制度は、紙幣や通貨などのフィクションを信じる人間の能力に全面的に依存しています。同じようなことが、宗教や政治制度、言語、文学、芸術などについてもいえ、人類がフィクションを信じるが故にこれらの活動が成立するという

のです。ネアンデルタール人は、この部分が少し劣っていたのだらうと推論されます。

フィクションの共有認知が重要という点では、新型コロナウイルスなどの感染症への対策も端的な事例の一つです。ウイルスは目に見えませんが、政府が要請しているソーシャル・ディスタンスとか、国民が「フィクション」を共有できないと、まるで効き目がないでしょう。そのようなわけですから、指導者が共通に認知すべきことを社会にしっかりとわかりやすく発信することが、とても重要になるのです。

ちなみに、私個人としては、日本人の生活習慣には感染症対策が元来埋め込まれているように思っています。我々の祖先は、過去随分感染症に苦労したのだらうと思います。古の時代には科学もありませんので、感染症を防ぐ方法論はしばしば宗教的戒律や生活習慣に現れます。宗教上の穢れの概念とかがありますが、あれも感染症対策が関係しているかも知れません。日本人は、土足禁止とか、お辞儀であいさつしたり、箸で食事したり、微妙な距離感で人と接するなど、特有の生活習慣がありますが、これらは疫病から我々を守るために古から培われてきたのかもしれない。

「フィクション」は、もう少し別なことばで「ヴィジョン（幻）」とか「パラダイム」と言い換えることもできます。人類の集団社会では、誰かが新しいヴィジョンを打ち立て、共同体がそれを信じて突き進むと、革命や社会変革が起きます。フランス革命では、王権神授説をあっという間に捨て去って、市民社会・民主主義の時代に移ります。明治維新なども、松下村塾で吉田松陰の薫陶を受けた僅かな若者が、大変な勢いで江戸幕府を倒したりするわけです。東京大学のキャッチフレーズは「志ある卓越。」ですが、これもヴィジョンといえるでしょう。

最近では、このフィクションがツイッターとかSNSを介して流れます。ただ、こういうフィクションは、良い面だけでなく、フェイクや陰謀論などの悪い面もあるので要注意です。たとえば、自ら「フェイクニュース！」と良くツイートするトランプ大統領を支持する一派が陰謀論を信じて、今年1月6日に米国連邦議会議事堂に侵入し、4人の死者が出るという前代未聞の事件が起きました。私は最初このニュースを聞いたときはそれこそ「フェイクニュース」なんじゃないかと思いましたが、なんと事実でした。ネット化社会における莫大な玉石混淆の情報の洪水の中、フィクションの質も低下しています。皆さんは、身につけた教養力で情報の真偽について判断できるようになって欲しいです。

サピエンス全史の第2の論点は農業革命です。ハラリはこれを「最大の詐欺」とまで言っています。農業の発明は人口増大に結びつくので、良いことと取られられてきましたが、実は災いの元だったというのです。たとえば、農業するために人間が土地に縛り付けられて、領土紛争とか国家、法律、戦争などが出てきたとか、農作業による腰痛とか、収穫の変動による餓え、人口密度増大に伴う感染症もひどくなったとかなど、実は人類にとってさんざんの結果をもたらしたのだというのです。

第3は科学革命です。科学的知識の集積で、産業革命などが起きました。現在では、ゲノム編集やゲノム解読などのバイオテクノロジーに加え、情報通信技術や人工知能が急速に発展しています。私も生命科学を研究しながら、ある意味でもう人類は神の領域を超え始めているのではないかと感じています。将来はハラリが『ホモデウス』で主張するように、遺伝子工学や細胞工学を用いた医療革命で永遠に死ななくなるかもしれません。個人的には、それは生きながら地獄みたいに思えますので、ちょっと避けたい気がします。

さて、本日の論点の認知革命に戻ります。フィクションは、状況に応じて変更やアップデートが可能です。このダイナミックで柔軟な仕組みを用いて、人類は環境や状況の変化に柔軟に対応し、生き延びてきました。ホモ・エレクトスとかネアンデルタール人はこういった信用共有やアップデートの仕組みを持っていなかったもので、例えば感染症の中で生き残れなかったと考えられます。

サピエンス全史で、未知なるものへの探求という人類の欲求について語られています。これに関しては、1492年の新大陸発見後の1525年にサルヴィアーティが書いた世界地図が面白いです。それ以前の地図は、ヨーロッパ人が知っている欧州大陸などだけが地図に書かれています。サルヴィアーティの地図ではアメリカ大陸のその先は大きな空白になっています。人類が世界に対して「無知の知」を自覚したということでしょう。哲学・科学の歴史についても、「無知の知」というのがとても重要な転機になっています。人類の知的活動については、このような探求を通じた、フィクションのアップデートのサイクルが重要ですが、それこそが「教養」が生み出すものだと思うのです。

人類はこれまで幾度となくフィクションを改訂し、社会のあり方を大幅にアップデートしてきました。これは、まず少数派が時代の常識を疑うところからスタートし、その壁を乗

り越える普遍的な新概念を打ち立てて、それに基づく行動に出ることで進んでいきます。この原動力となるのが、先人の英知や歴史を学びつつ、多様な価値観で批判的に物事を分析し、新たな世界を構想する力、そしてそれを他者に説明して大きな流れにしていく力であり、まさに教養の持つ力です。現代社会はエネルギー問題や環境問題、格差や差別解消など、さまざまな課題を抱えています。これらについて、どういう新しいヴィジョンを描くかが、今後の人類の命運を握るというわけです。

皆さんはこの学部で、「志ある卓越。」という東京大学のヴィジョンのもと、それぞれ教養を身につけたと期待しています。人類社会が進む新しい道のりを切り開くのは教養の武器を手にした皆さんだと信じ、皆さんの今後の活躍を心から祈念しています。これから始まる知の冒険の世界に踏み出す皆さんに、ひと言祝福のことばを伝えます、ボンボヤージュ！

2021年3月18日

東京大学教養学部長 太田 邦史